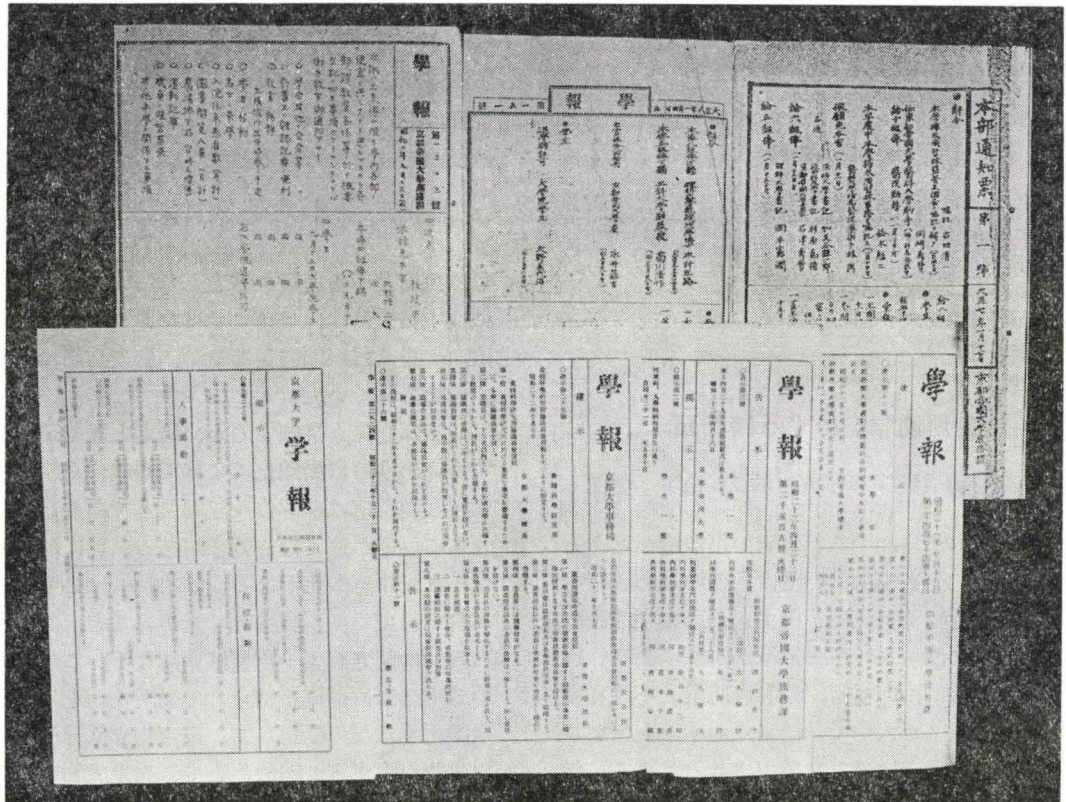


Title	京大広報 No. 244
Author(s)	
Citation	京大広報 (1982), 244: 299-304
Issue Date	1982-12-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/209442
Right	ファイル中には未許諾による非表示部あり.
Type	Others
Textversion	publisher

京大広報

No. 244

京都大学広報委員会



「学報」の変遷—関連記事本文 300 ページ—

目 次

昭和57年度医学教育等関係業務功労者の表彰……………	300
「学報」4,000号を発売……………	300
昭和57年度京都大学市民講座	
講演要旨Ⅱ……………	300
第30回食糧科学研究所講演会……………	301
公開シンポジウム	
「就職危機における進路選択をめぐって」……………	301

＜随想＞	
ユーモアのメリットとデメリット	
名誉教授 長石 忠三……………	302
＜紹介＞	
木材研究所・爆砕処理装置	
一木質残渣の有効利用のために……………	303
討 報……………	304
白馬山の家……………	304

＜大学の動き＞

昭和57年度医学教育等
関係業務功労者の表彰

文部省では、毎年医学又は歯学に関する教育・研究もしくは患者診療等の補助的業務に関し顕著な功労のあった者に対して、医学教育等関係業務功労者表彰を行なっている。本年度は11月16日、文部省において表彰式が行われ、本学関係では医学部附属病院看護部 島 まさ枝官が文部大臣から表彰を受けた。

「学報」4,000号を発刊

本学「学報」は、大正7年1月17日に「本部通知票」として第1号が創刊され、同8年1月4日

付第131号から、名称が現在の「学報」となり、昭和57年11月12日付で、発行号数が4,000号を数えるに至った。

「学報」は、大正8年1年間の184回をはじめ、昭和19年と同20年は年1回発行するなど不規則な時期もあったが、昭和33年からは原則的に毎週1回金曜日に定期発行されている。また、掲載事項、体裁等は変化しているが、この65年間、学内規程（達示）、大学の諸行事（告示、掲示）、人事異動、叙位、叙勲、学事、その他に諸報として部局行事・講演会・レクリエーション事業・表彰等を迅速に学内へ周知させるとともに、特に、学内規程の制定・改廃を公示する唯一の機関紙としての役割をはたしている。

昭和57年度京都大学市民講座
講演要旨Ⅱ

食用油脂をめぐる諸問題

食糧科学研究所 教授 松下 雪郎

一般に所得が増加すると油脂の摂取量が増える傾向にあり、先進国においては、そのため健康を害し、肥満を招く可能性が出てきた。まず油脂の摂り過ぎによりエネルギー摂取が過剰になる。摂取する脂肪酸についても、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸のバランスが大切で、前者は血中コレステロールを増し、後者はそれを低下させる。不飽和脂肪酸のうち、リノール酸とリノレン酸は動物体内で合成できないので、必須脂肪酸とよばれ、食物として摂取しなければならない。リノール酸はアラキドン酸へ導かれ、アラキドン酸は血管系や筋肉系に作用して種々の体調機能の調節をする局所ホルモンであるプロスタグランジンの合成源となる。その中には、血小板を凝集させて出血を止める働きのあるものや、その反対の作用をするものがある。一方エイコサペンタエン酸はリノレン酸から導かれ、それより合成されるプロスタグランジンの一種は、血小板凝集を阻止する。エイコサペンタエン酸は魚油に多く含まれ、したがって、

魚や魚を食べる海獣を常食としているエスキモーの血中脂質には、エイコサペンタエン酸が多く、出血の止り難い傾向があるが、脳や心筋のこうそくを起しにくい。

油脂は空気と接触すると、酸素と緩やかに反応するいわゆる自動酸化によって過酸化物を生ずる。この反応はラジカル連鎖反応であり、時間とともに反応が速くなる特徴がある。更に油脂の酸化には光増感酸化がある。植物油には必ず葉緑素が含まれてくる。葉緑素に光が当たると、共存する酸素は励起されて一重項酸素になる。これは油脂の二重結合位に直接結合して過酸化物を生ずる。過酸化物は更に変化して、重合物や低分子の二次生成物を生ずる。過酸化物や二次生成物は食品成分と反応して食品の品質劣化を起すとともに、中毒の原因となる。

生体中でも脂質酸化は起り、生成物は生体成分と反応するので、これが老化と密接に関係するといわれる。生体中には、酸化を阻止したり、酸化生成物を除去する機構がいくつか備わっているが、その網を漏れたものが組織を損なう。これを防ぐため、外部よりなしうることは、ビタミンEを摂取することである。

油脂についての十分な理解のうえに健全な食生活を築きたいものである。

(10月30日)

緊張緩和政策について

法学部 教授 高坂 正堯

米ソ両国は第2次世界大戦後対立を続けて来ているが、冷戦の一時期を除いて緊張緩和策もおこなわれて来た。その基本的理由は、核兵器の出現の後では、戦争のもたらす損害が破滅的なものである、米ソ両国とも戦争の危険を避けることに共通の利益を持つことにある。それと共に、緊張緩和は戦術的な動きである。1950年代半ばのソ連の平和共存政策はソ連の弱点である東欧の安定化のために、ソ連に加えられている圧力を減じようとする考慮の産物であった。1960年代半ばにフランスや西ドイツの唱えたデタントは、緊張緩和によって東西ヨーロッパの交流を増大し、それによって長期的に東欧の変化を期待しようというものであった。

1972年の米ソ間のデタントはこうした二つの狙いの組み合わせだったものである。米ソ両国は核戦争の危険を減らすため、戦略兵器制限交渉の結

果、一連の協定を結んで、両国間の戦略バランスを安定させた。それと共にヨーロッパでは、東独の存在が承認されると共に、西独と東欧諸国の間に外交関係が樹立され、東西ヨーロッパの交流がさかんになった。

しかし、1970年代の後半にはデタントにかげりがさして来た。ソ連が軍備拡張を続けると共に、アフリカ、中近東にその勢力を伸ばし始めたからである。そして1979年末のソ連のアフガニスタン侵攻は米ソ関係を著しく悪化させた。ただ、西欧諸国はそれによってデタントが終ったとは見ていない。ひとつには対立と緊張緩和の努力が並存し、微妙に交錯するのが現在の国際関係の特徴だからである。彼らは、ソ連が軍事的優位に立つことがないよう留意し、必要な努力をおこなうと共に、緊張緩和の努力も継続し、交流もつづけるという、いわば「混合政策」を主張している。そこにロシアとのつき合いが長いヨーロッパ人の叡知を見ることができよう。

(10月30日)

<部局の動き>

第30回食糧科学研究所講演会

食糧科学研究所では11月12日(金)、宇治地区研究所総合館5階大会議室において恒例の学術講演会を開催した。午後2時から同5時まで行なわれ、学内外から多数の来聴者があった。演題と講師は、次のとおりであった。

硝酸還元同化系の諸酵素	井田 正二
生物による太陽エネルギー固定	浅田 浩二
食用油脂の栄養性、安全性	鬼頭 誠
ビタミンEの抗酸化作用	松下 雪郎

(食糧科学研究所)

公開シンポジウム「就職危機に おける進路選択をめぐって」

学生懇話室と保健管理センターとの共催で、11月13日(土)午後1時から5時まで経済学部特別講義室において、公開シンポジウム「就職危機における進路選択をめぐって」が開催され、約30名の出席者があった。学内外のパネリストによって

多方面からの問題提起がなされ、活発な討議が行なわれた。特に私立大学の就職問題関係者や民間の就職機関の現場からの報告に、参加者は就職状況の厳しさについて問題意識を新たにしていた。

司 会

教育学部教授 梅本 堯夫

話題提供者

就職問題をめぐる現代若者気質について

同志社大学就職部長

(日本私立大学連盟学生就

職問題協議会副委員長) 河合 璋

就職・進路問題について

日本リクルートセンター

大阪社情情報資料室課長 島田 雅文

就職後における京大人の社会生活について

経済学部教授 池上 惇

生きがいの構造からみた選職パターンについて

学生懇話室長 石井完一郎

(学生懇話室
保健管理センター)

されず逆に結晶性が増大する。木材は爆砕によって物理的に破壊されオカラ状の物質に変化する。このようにして得られた爆砕木材はそのまま牛やヤギの飼料として有効で、農学部畜産学科との共同研究の結果では80%近い消化率を示した。この値は最も良い牧草アルファルファの消化率と同じ値である。また、爆砕木材をセルラーゼ酵素糖化すると、木材の60%が糖化されアルコール醗酵に用いることができる。これまではイモ、キャッサバのデンプン・糖蜜などがアルコール醗酵の原料として用いられていたが、これらは食用として利用すべきで、これからは食用として利用できない木質残渣などを醗酵原料として用いなければならない。爆砕法は最も効率的で無公害・省エネルギー的な木質残渣の処理法で、当研究室では爆砕法の

実用化に向けて研究を進めている。また、これまでのパルプ化法（クラフト蒸解）では薬剤回収のためにリグニンを熱源として燃やしていたが、地球上に多量に存在するリグニンは石油に代る芳香族資源であり、爆砕木材の多糖の利用に伴って多量に生産される。したがってこのリグニンの有効利用も今後の重要な研究課題である。リグニンは爆砕木材からメタノール抽出により容易に取り出せるので、リグニンのプラスチック化、液体燃料及びファインケミカルズへの変換等の応用研究が計画されている。

木材爆砕法の基礎及び応用研究は、今日の資源及びエネルギー問題の解決に貢献できるものと期待している。

(木材研究所)

計 報

平野 勇 (理学部助手)

10月29日逝去, 49歳。本学大学院理学研究科修士課程修了。昭和35年教養部助手就任, 同39年理学部助手

(附属地震予知観測地域センター)。専門は地震計測学及びデータ処理。

山田 弘一 (学生部厚生課事務官)

11月19日逝去, 58歳。昭和43年学生部学生課勤務, 同44年学生部厚生課に配置換。

はくば 白馬山の家

毎年、利用者から好評を得ている白馬山の家を、今冬も下記のとおり開設しますので、本学の学生及び教職員で利用を希望される場合は、下記を参照のうえ、申し込んで下さい。

この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓の柵池高原にあり、四方を北アルプスの峰々に囲まれ、冬季には積雪量も多く、雪質の良さとともにスキーには絶好の条件を備えています。

建物は山小屋風の木造地上2階地下1階で、間取りは、1階に食堂兼談話室、2階が寝室(ベッドで42名収容)、地階が浴室、乾燥室等になっています。

記

1. 名 称 京都大学白馬山の家
2. 所在地 長野県北安曇郡小谷村大字千国字

やなぎくぼ 柳久保乙869の2

(交通機関)

国鉄大糸線「白馬大池駅」下車, 松本電鉄バス「親^{おや}の原^{はら}」下車, 徒歩約20分

3. 利用期間 12月20日(月)～1月10日(月) ならびに 2月20日(日)～4月10日(日)
4. 所要経費 1人1泊, 使用料80円, 暖房料50円, ほかに食費等実費程度
5. 申し込み及び利用に関する詳細の問い合わせは、体育会事務室 (西部構内総合体育館内, 電話学内2574) あてにして下さい。
6. 備 考 山の家のある柵池高原には、初心者向きから上級者向きまで各種のゲレンデがあります。

(学生部)